

2004年10月23日、新潟県中越地方を襲った中越大震災は人口2200人の山古志村を全村崩壊させた。山が崩れ、川に土砂が流れ込み集落を水没させた。田圃や養鯉地の底がぬけ、牛舎が倒壊し多数の牛たちが死んだ。コンクリー道路がめくれ上がり、住居は軒並みに全壊半壊し、電気や水道のライフラインは息を止めた。地震発生の翌日、当時の村長・長島忠美は全村避難を発令して住民達は自衛隊のヘリコプターで長岡市へ避難した。「もう、山古志へは永久に戻れないかも知れない」ヘリの窓から見える山古志村の惨状に人々はそう思った……

あれから6年、山古志の人びとは
壊滅的打撃から、なぜ、いかにして立ち上がったのか

東日本大震災被災者救援チャリティ（収益金を救援のために寄付します）
感動のドキュメンタリー映画（120分）上映会

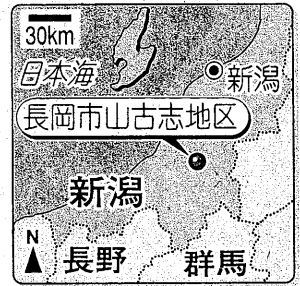


上映日 **8月21日(日)** 上映後に短時間、感想交流会も行いますー
上映時刻 10:00 13:00 16:00 19:00
会場 諏訪湖ハイツ コンベンションホール(中3階)
参加費 当日券のみ1000円(中高校生は500円) 大震災被災者はご招待(無料)
お問い合わせ窓口 080-1040-7463
詳細情報は、Webで「すわか文化村」を検索してください

NPO非営利活動任意団体 **すわか文化村**(代表理事毛利正道・村民68名) **第20回企画**

避難中も集落のつながりを守る

山古志



冬の間は4メートル以上あつた雪が解け、まばゆい緑が広がる新潟県長岡市山古志地区(旧山古志村)。2004年10月23日、この中山間地を中越地震が襲った。至る所で山が崩れ、道路は

課長だった青木勝さん(61)は振り返る。

14集落約700世帯、約2千人が暮らしていた旧山古志村。

地震でライフラインが寸断され、全村民が翌年に合併予定だった長岡市へへりで避難した。

最初は避難所に分散して入っていたが、地震10日後には集落ごとに避難所を再編した。

その結果、住民の家族構成などを把握している区長が中心と

集会所は、村の復旧や将来を話す場として大きな役割を果たした。

東日本大震災の被災地でも、建設が急がれる仮設住宅。青木さんは「結束が強い地域なら、山古志のように集落ごとにすれば、住民自ら動けるようになる」と指摘。入居先の決定に当たって「抽選もやむを得ないが、地域コミュニティに配慮した事例をつくることも必要」と力を

中越地震に見舞われた中山間地では、世帯数が半減した集落が多かったが、想定を上回る約500世帯、約1400人が戻った。

ただ過疎化や高齢化は進む。どう集落を維持していくのか。重い課題をはね返そうと、活性化を目指す動きも出てきた。

油夫集落では復興を応援するため09年、米国から贈られたアルパカを観光の柱の一つにと、飼育が始まった。休日には9世帯の小さな集落に多くの人が詰め掛け、住民が直売所を開く。

同集落の青木恵子さん(69)は「アルパカの世話や直売所が生きがいになった。ストレス発散にもなるの」と笑った。

「ムラへ帰ろう」「合言葉に

根こそぎ寸断された。しかし、住民の多くが、年月を経て戻った。原動力となったのは「帰ろう山古志へ」の合言葉。長い人で3年に及んだ避難生活の中で集落のつながりを維持し、住民が一体となって古里への思いを共有した。

「山古志での基盤は集落とい

う共同体。地域再生のためには、この機能を復活させなければならなかった」。当時、村の企画

なって活動できるように、

住民と行政の意思疎通や情報伝達がスムーズになった。何よりなじみの顔がそろい、安心感が生まれた。当時の長島忠美村長(現衆院議員)らが「ムラへ帰ろう」と呼び掛け、住民の多くは帰村を望むようになった。

地震約2カ月後から入居が始まった仮設住宅も、集落単位に編成。周辺には集会所やボラン

ティアセンターを設けた。特に

込める。

最長約3年の仮設生活の後、山古志に帰った住民は約7割。

取材ノート 被災地復興のお手本に

東日本大震災で被災し、新潟県長岡市に避難する福島県の男性に山古志地区で出会った。地域活性化の取り組みを聞きに来たという。「山古志をお手本に、私たちも復興したい」。涙がにじんできた。中越地震で将来を危ぶまれた地域が、被災地の目標となるまでになった。しかし人口減は避けられない。集落が消えることなく、本当の意味で「復興」の地であり続けてほしい。(新潟日報社・丸山俊子)